

## 読みの交流における授業者の役割—「山月記」の学習

増田 知子

基調に挙げられているように、「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の視点からの過程の改善」が注目をされているが、この場合の「深い学び」とは具体的にどのようなものである。本校の国語科で3年度までの3年間、「知識基盤社会」に対応する「総合的に考える力」を身にさせることを目指して授業の中で行ってきたのは、結びつけて考えるということであったが、そのことによって得られる「深い学び」というものもその一つである。

「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」を目指して授業の中で読みの交流をさせていて感得なのが、学習者個人の学びは深まっているのかという点である。たとえば「山月記」を授業で扱う主題について考えさせることが多い。授業者が一つの主題にしばることは主体的な学習にはならずと考え、読みの交流を行う。そこで学習者は自分とは違う読みを知ることにはなるが、その様な読みをすべて認める中で、はたして学びが深まっているといえるのかということである。多様な読みを認めるといっても、その読みの根拠を示させることは必要であると考え、このたびは主題を考え、その根拠にするように、「人虎伝」との比較を学習活動の中に入れて、このような学習過程で授業を行った。

第一次 「山月記」の読解

第二次 「山月記」と「人虎伝」の比較

第三次 二次でまとめた表を持ち寄り、「山月記」で作者が伝えだかったことを自分かたで考え、(「人虎伝」との比較を根拠にする。)各班から出されたレジュメを班ごとに紙面読み、質問する。質問を受けた班は紙面で返答する。

第四次 「山月記」で作者が伝えだかったことをまとめる。このたびの学習について感想を書く。

学習の第四次で学習者が書いたものを見ると、班ごとに考えをまとめ、それに対する質問をやり取りの中で、考えがあいだったことに気づいたというものが、様々な意見を通して自分の意見を見ることができたというものが、また、この学習によってさらにこのお話がわかなくなったというも見られた。自分の読みが交流によって揺さぶられたという点で、一定の成果と考えることもでき、学びが深まったかどうかについては、各学習過程での活動を分析し、考察していく必要がある。

主体的な働きが活かしながら学びを深めるには、「山月記」の学習では具体的に授業者のどのような働きが必要なのか。テキストの表現を結びつけること、「人虎伝」と比較すること、学習者から出された読みを対立させること等によって得られる「深い学び」というものに着目して考えていきたい。